

いのちの森「生き方と働き方学校」 青少年社会教育実習

「いのちの森水輪での学びを振り返って②」

倉持 友美

私はいのちの森水輪を「卒業」という形ではありましたが、中途半端な心で卒業しました。

もちろん、いのちの森水輪で教わったことがすべて無駄になっただけでなく、切り替える力や大きな声で挨拶すること、掃除の仕方など、学んだことで仕事にも生かせる事がありました。

しかし、社会の壁にぶつかるとも多々あり、なかなか乗り越えることは出来ません。本来ならば、ちよつとやそつとのことではくじけず、今ある現実には立ち向かってゆく、そんな強い心を持ち卒業してゆくべきだったと思います。

だからみどり先生は中途半端な卒業はよくないとおっしゃったのだと思います。

けれどいのちの森水輪にいたころの私は友達のこと、マンガやアニメのこと、そういった目先のことばかりに囚われていて、先の見えない未来におびえ、不安で心がすくづけていました。



定期的に勉強会で脳や心のことを各界一流の先生から学びます

で頑張ったら、3月には卒業できるかもしれない」と、ある時言われました。

でも、頑張ったのは自分が卒業したいがため、「卒業」と言う名の人参をぶら下げて「それにつられてる」そんな感じだったと思います。

もちろん「どんなことにも一生懸命。そうすれば必ず、その努力は報われる」と思って頑張った時もありましたが…

結局、私はいのちの森水輪を中途半端に卒業してしまいました。

卒業後「今の自分でもできるはずだ、私はちゃんと働ける」と自分に言い聞かせて、宅配業者でアルバイトを始めましたが仕事は大変です。でも、いのちの森水輪で

やってきたことを思い出し、頑張りました。

しかし、単純なバイトでもミスをする場合があります。一番大きなミスは、ある会社にお届けする大切な精密機器を台車に載せて運ぶ際、台車を引っかけた精密機器を落としました。宅配業者の方、配送先の会社にも多大な迷惑をおかけしてしまいました。

申し訳なきやいろんな感情が押し寄せ、センターに戻って泣いてしまいました。いのちの森水輪スタッフの方がいつも言っていた「切り替える」ということを思い出し、「泣いてばかりじゃいけない、次は同じ失敗をしないように十分注意しよう」と思い「すみません、切り替えます」と言って泣き止み、切り替えることが出来ました。

この「切りかえる」という学びをいのちの森水輪で学んでなければ、昔の私なら逃げていたでしょう。でも、切り替えることができ、結果良い方向に行けたのは、いのちの森水輪の皆さんから学ばせて頂いたおかげだと思います。

私の課題である「丁寧なのは大事だがスピードが遅い」ということで悩むこともあります。大切なお客様のお荷物は丁寧に扱い誤配をしてはいけないので、慎重にや



大自然に触れ、野菜を育てることでのちの森の営みを体験します

ろうとするあまりに、スピードがゆっくりになってしまったり、必要以上に何度も確認したり、私は自分では普通の時間だと思っても、相手から見れば遅く「もう少しスピードをあげよう」と言われることもあります。

そのことで「なんで自分は出来ないのだろう、頑張っているのになんでスピードが上がらないのだろう、やはり私には無理なのだろうか？」と自分を追い込み涙することもありますが、職場ではいのちの森水輪のように自分の直したほうが良いところや、こうしたらもっと良かったんじゃないかなど、客観的に見てアドバイスして下さる人はいません。どうしても一度で覚えられないことは何度か聞いたりしますが、基本的に社会では「誰かから」ではなく「自分で」覚えてゆかなければなりません。社会の知識もある程度は分かっているといけません、後から「こん

なことも知らないの常識だよ」と言われてしまうかもしれません。

とは言え、今までほとんどマンガやアニメやゲームと言った、夢見がちな右脳の方がかりに偏っていた私が、左脳も両立して使えるかと言うと中々そうもいきません。

何とか覚えようと、政治や経済の本を読んだりするものの、途中で「もう見たくない」と思ってしまう、脳が拒絶を起し、頭が痛くなり結局はあやふやなままです。「こんなんで、どうやって社会で生きてゆけるのか」私は深く悩みました。

社会では「この人は働けない人」と思われてしまえば容赦なく切り捨てられます。社会には非情なまでの厳しさがあります。

でも、いのちの森水輪は厳しさの裏に愛情がある。そこが社会との大きな違い。いのちの森水輪にいる人は、本当に「今」を後悔の無いように生きなければいけない。でも、私のように中途半端な心の状態で社会に出てゆくと壁は多いです。

確かに卒業すれば自由にどこにでも行けるし、マンガやゲームなども見たり買ったり出来る。それが全て悪いことではないけど、みどり先生が心配して下さってい

「た「誘惑の世界」それが私の今いる世界であると。確かに好きなものが手に入ったり、食べたいものを食べたり、それが嬉しいと感じることも多々ある。けれど、それに溺れてばかりいると本当の幸せなこと、大事なものが、それが分からなくなってしまう、全てが当たり前のようにあるものと思ってしまう。それは本当に恐ろしいこと。物ばかり頼り、それで溢れてしまうと、それがあることで自分は満たされている、物があるから自分は大丈夫と、物に執着し「心」を物に持ってゆかれてしまう。

そうになると、いざ物が無くなり手に入らなくなるとひどくショックを受けて「これが無いと、あれが無いと私は生きてゆけない」そう思ってしまう。気づいた時はもう遅い。本当に大切なものは何なのか分からなくなる。それが今後の自分の人生にどれほど大きく関わって来るのか、考えるだけでも恐ろしいことです。「物に執着しては



床を磨くことで、丹田を鍛え、集中力と気力を養います

いけない」みどり先生がよく私たちに言うことです。私は本当に大切なもの、大事なものを離れて初めてその大切さに気づきました。家族のことも、普段私たちが当たり前のように食べたり飲んだりしているもの、それもどのように生産されてゆくのか、命の在り方や大切さ、人は何かの命によって支えられ生きているということ、そんなことも物に溺れてしまうと分からなくなる。何が大切か、いつも自分の心を磨いている人しか見えてこない大切なものがあるので。ましてや農業は、農家に生まれた人や農業の道に行きたいと思う人じゃないと触れる機会はありません。お野菜を育てる心や自分が育てたからこそお野菜のいのちを大切に扱うなどのことはめったにありません。人は自然から離れると心を失って物(金)にしか興味のない人間になっていってしまう恐ろしさがあります。

例えば、お野菜はスーパーへ買いに行きますが、いのちの森水輪では、野菜は畑で自分たちで種を蒔いて、自分たちの手で育て、実った野菜を収穫して初めて手に入る事が出来ます。一見当たり前のように思えますが違います。私達はスーパーに行けば当たり

前のように人参があると思ってしまうが、いのちの森水輪では自分たちで育てなければ、野菜は収穫することが出来ないのです。野菜は、誰かの手が加わらないと手に入る事が出来ないもの、当たり前のようにあるわけではないと言ったことが実感できます。

簡単に手に入ったときと、苦労して手に入れたものとは、喜びも大きく違ってくると思います。ましてや、自然農法で無農薬、こんなに身近で、安心、安全なお野菜のいのちを頂くことが出来るのは幸せなことだと思います。

いのちの森水輪は、こうして何かを育てることで「命」の大切さ、在り方、生き方、素晴らしさを学んでゆくことが出来るのです。だから「今」という一瞬一瞬を、一日一日を大切に生きて行かなければもったいないことです。

しかし私のように、どうしても外の世界に憧れ、そっちの方にばかり意識がいつていると、目の前のこともおろそかになり、せっかく自分が学べて成長できるチャンスも逃してしまいます。みんなには、自分のように失敗してほしくありません。社会で壁にぶつかっても、その壁を乗り越えてゆける力をつけていってほしいです。

私が今、食前に食事の偈(しょくじ)のげ・いのちの森水輪の食事の前の祈りを家に戻って続けているのは、いのちの森水輪で学んだ「心」を忘れない様にするためです。

いのちの森水輪を卒業して

先日卒業後にボランティアでいのちの森水輪に行かせて頂き、また新たなことを学ばせて頂きました。今はもう卒業した私が、母屋に何事も無いように入って行ったとき、陵太郎さんが「倉持さんは、今はもう外部の人なのだから、みどり先生に一言、なんでここに来たのか何でここに居させて頂くのか、ここに居させてもらえるありがたさというものを感謝して、感謝の思いを持って言わなくてはいいけない」と指摘を受けました。こんな一般的な礼儀も知らなかった私に、陵太郎さんは丁寧に教えてくれて、私が泣いて混乱していた時も話を聞いてくださり、アドバイスして下さいました。

みどり先生もそうです。ただ、もしこれが社会なら「変な子」と思われて話も何もしてくれないと思います。いのちの森水輪では決して「変な子」などとは思わず、ひとりの人間の中にあるダイヤモンドを信じて、磨いて育ててい



卒業後も家族の協力のもと、学びは続いています

てくれたのだと本当に心から感謝しました。

こうして、自分に対し、指摘をしてくれること、アドバイスをしてくれること、話を聞いて理解してくれる人がいること、これは本当にありがたいことだと思います。指摘などを受けたとき、その人がどういうとらえ方をしているのか、それだけで、大きく成長は変わってゆきます。いやな顔して「うるさいな」などと思ったり、ムツとして聞いていけば、その人は成長するどころか、マイナスの方ばかりに行ってしまう。世の中ではこうして「変な子」で切り捨てられていってしまう。

せつかくこうしたらいいと言っ下さっている事に対して、それに応えないのは、自分の悪い部分にも気付かず、どんどん自分に甘え「このくらいいいじゃないか」と自分で自分を甘やかし、いつしか変わろうとする意識さえも無くなり、いざ社会復帰し裏面に続く